

ポー・カレン語の「格」

加 藤 昌 彦

0. 言語の概要

ポー・カレン語 (Pwo Karen) は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派カレン語群に属する言語である。基本語順は SVO で、語形変化はなく、いわゆる孤立語的特徴を有する。チベット・ビルマ系諸言語は一部の例外を除いて一般的に SOV 型言語であるが、カレン語群に属する言語のすべては SVO 型である。筆者は、チベット・ビルマ語派におけるカレン語群の語順の特異性は、カレン祖語段階におけるモン・クメール系の何らかの言語との接触の結果として生じた可能性が高いと考えている。

ポー・カレン語は、ミャンマーのエヤワディ・デルタ (Ayeyarwaddy Delta)、モン州 (Mon State)、カレン州 (Karen State)、タニンダーイー管区 (Tanintharyi Division)、タイ北西部 (Northwestern Thailand)、タイ中西部 (West-Central Thailand) などに分布する。Kato (1995) は、ミャンマー側のポー・カレン語方言群を相互理解の可能性を基準に、Western Pwo Karen と Eastern Pwo Karen の 2 つに分類した。Phillips (2000) はこれにタイ側で話される Northern Pwo Karen を加えている。さらに Kato (2008) は、これまでに報告されている諸方言との相互理解が不可能な Htoklibang Pwo Karen について報告した。これらの先行研究をもとに、本稿では暫定的に次のような方言分類を行っておく。

方言	分布地域
Western Pwo Karen	エヤワディ・デルタ (ミャンマー)
Htoklibang Pwo Karen	モン州ビーリン (Bilin) 郡 (ミャンマー)
Eastern Pwo Karen	カレン州 (ミャンマー)、モン州 (ミャンマー)、タニンダーイー管区 (ミャンマー)、タイ中西部
Northern Pwo Karen	タイ北西部

本稿で扱う方言は、ミャンマー連邦カレン州の州都パアン (Hpa-an) 周辺で話される方言で、Eastern Pwo Karen に属する。これをパアン方言 (the Hpa-an dialect) と呼ぶ。パアンの北東約 30km にあるフラインボエ (Hlaingbwe) の方言や、パアンの東南東約 70km にあるコーカレイ (Kawkareik) の方言は、パアン方言に含めて考えることができる。

カレン語群にはポー・カレン語以外に、ブリモー (Blimaw)、ボエー (Bwe)、ゲーバー (Geba)、ゲーコー (Gekho)、カヤー (Kayah)、カヨー (Kayo)、カヤン (Kayan)、マヌ (Manu)、モーネーボワ (Monebwa)、モーポワ (Mopwa)、パクー (Paku)、パオ (Pa-O)、スゴー・カレン (Sgaw Karen)、タレー・ボワ (Thalebwa)、イェインボー

(Yeinbaw)、インタレー (Yintale) などを含む様々な言語がある。カレン語群の言語のうち、ポー・カレン語に系統的に最も近い言語のひとつはスゴー・カレン語であると言ってよいだろう。Jones (1961) はポー・カレン語とスゴー・カレン語をカレン語群の中では遠い関係にあると考えたが、両言語の語彙の一致率の高さと文法特徴の共通点の多さから見てそれはあり得ない。カレン諸語の分類を試みた Shintani (2003) は、カレン語群 (Shintani の用語では ‘Brakaloungic’) の中に Sgaw-Pwo Branch をたて、その中にポー・カレン語とスゴー・カレン語を入れている。同様に Manson (2003) も、ポー・カレン語とスゴー・カレン語を比較的近い位置に置く。ミャンマーでカレン民族 (ビルマ語で /kăyìn lūmyó/) というと、最も狭義にはポー・カレンとスゴー・カレンのみが含まれる。この民族的分類はポー・カレンとスゴー・カレンの言語の近しさを反映している可能性が多分にある。

ミャンマー国内におけるカレン人全体の人口は、1993 年ミャンマー政府推計で 286 万人である。このうち約半数はポー・カレン人だと思われる。また、Lewis (1984) によれば、1983 年中期のタイ国内におけるスゴー・カレンとポー・カレンを合計した人口は 24.6 万人であり、このうち約 20% がポー・カレンだという。

1. 格標示形式の目録

本稿では、次の (A) のような特徴を持つポー・カレン語の形式を格標示形式と定義する。

(A) その形式の働きによって、名詞句が動詞節中に存在できる。

このような機能を持つ形式により、名詞句は節中に導入され、節の主要部である動詞に従属する。この特徴を持つ代表的な形式が側置助詞である。側置助詞は他言語の文法記述で一般に前置詞や後置詞と呼ばれている語類に相当する。加藤 (2004) は、ポー・カレン語の語類として、名詞 (noun)、動詞 (verb)、副詞 (adverb)、助詞 (particle)、感嘆詞 (interjection) の 5 つを設定した。このうち助詞は、単独では発話できない語類と定義できる。助詞はさらに、側置助詞 (adpositional particle)、従属節助詞 (subordinate clause particle)、一般助詞 (general particle)、名詞修飾助詞 (noun modifying particle)、動詞助詞 (verb particle)、副助詞 (adverbial particle)、文助詞 (sentence particle) の 7 つに分類できる。うち側置助詞は、名詞句を動詞節中に導入する機能を持つ助詞と定義することができる。すなわち、側置助詞の機能は (A) に示した機能そのものである。側置助詞は、名詞を両側から挟み込む *bê* ... *θò* を除き、名詞に前置される。

次に、あくまでも本稿に限っての措置として、(A) に定義した「形式」に動詞と項名詞句の相対的語順をも含めることにする。SVO 型の孤立語的言語であるポー・カレン語の主語名詞句は動詞の直前に、目的語名詞句は動詞の直後に、ともに無標示で現れる。この語順を、動詞の前や後に名詞句を導入する一種の形式であると見なす。語順は格標示形式には含めないのが言語記述においては一般的である。しかし、言語によっては一般的な意味での格標示形式と同じ役割を語順が担っている (Blake 2001:14-15)。ポー・カレン語もそのような言語である。この論文集の

大きな目的のひとつは、チベット・ビルマ系諸言語が名詞の対主要部関係標示にいかなる形式を用いているかを対照することである。対照研究のためには考察対象を狭い範囲の言語現象だけに限ってしまうのは得策ではないことがある。ことに、考察対象から漏れることになる言語現象がその言語において重要な役割を担っている場合にはなおさらである。このような事情を考慮し、本稿ではここに限っての便宜的措置として、動詞と項名詞句の相対的な語順も格標示形式に含める。

上記のように定義したとき、ポー・カレン語の格標示形式には以下の表に示すようなものがある。なお、この表からは、後に述べる場所名詞や側置名詞のような、側置助詞と共に起し得るものは除外してある。括弧の中の数字は当該形式について言及している節番号である。

格標示形式	意味	語類
動詞の前 (2.1)	S/A	—
動詞の後 (2.2)	P	—
ló (3.1.1)	位置/着点/起点; 時点/時間的区間の起点	側置助詞
thōN (3.1.2)	位置; 時点	側置助詞
dē (4.1)	道具; 随伴者; 付帯物; 相互 的な状況の相手; 様態; 三 項他動詞を用いた使役構 文の被使役者	側置助詞
bē ... ðò (4.2)	~のように	側置助詞
nî (4.3)	~くらい(大きさ)	側置助詞
xwē (4.4)	~くらい(量)	側置助詞
báchâin (4.5)	~について	側置助詞
təkhâlá (4.6)	~以来	側置助詞
phō (4.7)	~のうちに	側置助詞

以下にポー・カレン語の格標示形式を見ていく。2章では S/A/P を標示する形式を見、3章では Local な意味役割を標示する形式を見る。そして4章ではそれ以外の格標示形式を扱う。続く5章では側置助詞 *ló* が強調を表す場合があることを指摘する。

2. S/A/P を標示する形式

ポー・カレン語で S/A/P を標示するのは相対的語順である。

2.1. S/A を標示する形式

自動詞の唯一項は動詞の前に置かれる。

- (1) *láiʔàu* ʔɔ́ lə *béin*
本 ある — CLF

本が一冊ある。

- (2) *phlòuNmwì* yɛ́
客 来る。

客が来た

他動詞の行為者 (actor) 項は同様に動詞の前に置かれ、動詞の後に置かれる被動者 (patient) 項とは、この語順によって区別される。

- (3) *θàʔwà* dú *θàkhléin*
(名前) 殴る (名前)

ターワーがタークレインを殴った。

2.2. P を標示する形式

他動詞の被動者 (patient) 項は、動詞の後に置かれ、この語順によって行為者項と区別される。

- (4) *θàʔwà* dú *θàkhléin* [= (3)]
(名前) 殴る (名前)

ターワーがタークレインを殴った。

三項他動詞を用いた節において、受領者 (recipient) を表す項と授受の対象 (theme) を表す項は、動詞の後に「受領者-対象」の順で並べられ、この語順によってそれぞれの意味役割が表される。

- (5) *θàʔwà* *phílân* *θàkhléin* *θàkwìθá*
(名前) 与える (名前) バナナ

ターワーがタークレインにバナナをやった。

なお、使役助詞を用いた使役構文について述べると、被使役者は、自動詞を用いた場合には二項他動詞の P と同じ位置に、二項他動詞を用いた場合には三項他動詞の受領者と同じ位置に、助詞による標示なしで現れる。

- (6) *jo* dà *chínàN* *θàʔwà*
1sg CAUS 座る ターワー

私はターワーを座らせた。

- (7) *jə dà dú θà?wà θàkhléiN*
 1sg CAUS 殴る ターワー タークレイン
 私はターワーにタークレインを殴らせた。

三項他動詞を用いた場合の被使役者は側置助詞 *dē* に導かれて現れる。4.1 を参照していただきたい。

3. Local な意味役割を標示する形式

本章では、まず 3.1 で場所に関わる意味役割を表す 2 つの側置助詞 (adpositional particle) を見る。そして 3.2 で場所的概念を表す一部の名詞の特異性に触れる。

3.1. 位置/着点/起点を標示する形式の種類

場所に関わる意味役割を表す側置助詞には *ló* と *thōN* の 2 つがある。

3.1.1. 側置助詞 *ló*

ló は名詞句に前置される側置助詞である。存在・出来事生起の位置 (location)、移動の着点 (goal)、移動の起点 (source) の 3 つを表す。以下にそれぞれ例を示す。

- (8) *phūkhwâ θè ?jó ló kòtərāi ?ò [位置]*
 弟 PL いる *ló* コーカレイ あの
 僕たちはコーカレイに住んでいます。 (IV-04.102)

- (9) *nànnâN mə thàiN ló thə?àN dòuN ?ò [着点]*
 姉 IRR 帰る *ló* パアン 町 あの
 私たちはパアンへ帰ります。 (IV-04.99)

- (10) *nànnâN θè yê thàiN ló θítâu ?ò [起点]*
 姉 PL 来る 帰る *ló* 病院 あの
 私たちは病院から帰って来ました。 (IV-04.96)

このように *ló* は、local な意味役割のうち位置/着点/起点のすべてを表す。問題は、任意の節中で *ló* に導かれた名詞句の意味役割が 3 つのうちのいずれであるかがどのように識別されるのかということである。これに関して最も重要な条件は動詞の種類である。動詞が非移動動詞の場合、*ló* は位置を表す。一方、*yê*「来る」、*lì*「行く」、*thàiN*「帰る」、*thán*「上がる」、*làn*「下がる」などを含む移動動詞の場合、*ló* は着点あるいは起点のいずれかを表す。移動動詞の場合に着点と起点のいずれであるかを識別する手立てとしては、文脈が重要な役割を果たすこともある。しかし、動詞が *yê*「来る」と *lì*「行く」の場合、より重要な手立ては、指示機能を持つ助詞の存在である。ポー・カレン語では、場所を表す名詞の後に助詞 *jò*

「この」(話し手の領域にあるものを指示する)あるいは?_ò「あの」(話し手の領域の外にあるものを指示する)が、義務ではないけれども非常にしばしば現れる。この2つが、動詞 $y^{\hat{e}}$ 「来る」と $l^{\hat{e}}$ 「行く」が使われた場合の意味役割の識別において非常に大きな役割を担っている。それは以下に述べるとおりである。

移動を表す動詞が $y^{\hat{e}}$ 「来る」の場合、 $l^{\hat{e}}$ によって導かれた名詞句に $j^{\hat{o}}$ 「この」が後置されているときには当該名詞句は着点を表し、?_ò「あの」が後置されているときには当該名詞句は起点を表す。たとえば次のとおりである。

- (11) ?_əw^ê m_ə $y^{\hat{e}}$ $l^{\hat{e}}$ th_ə?_ÀN $j^{\hat{o}}$
3sg IRR 来る $l^{\hat{e}}$ パアン この

彼はパアンへ来るだろう。

- (12) ?_əw^ê m_ə $y^{\hat{e}}$ $l^{\hat{e}}$ th_ə?_ÀN ?_ò
3sg IRR 来る $l^{\hat{e}}$ パアンあの

彼はパアンから来るだろう。

一方、動詞が $l^{\hat{e}}$ 「行く」の場合、 $l^{\hat{e}}$ によって導かれた名詞句に $j^{\hat{o}}$ 「この」が後置されているときには当該名詞句は起点を表し、?_ò「あの」が後置されているときには当該名詞句は着点を表す。

- (13) ?_əw^ê m_ə $l^{\hat{e}}$ $l^{\hat{e}}$ th_ə?_ÀN $j^{\hat{o}}$
3sg IRR 行く $l^{\hat{e}}$ パアン この

彼はパアンから行くだろう。

- (14) ?_əw^ê m_ə $l^{\hat{e}}$ $l^{\hat{e}}$ th_ə?_ÀN ?_ò
3sg IRR 行く $l^{\hat{e}}$ パアンあの

彼はパアンへ行くだろう。

$y^{\hat{e}}$ 「来る」は話し手の領域が着点であること、そしてそれ以外の場所が起点であることを要求する動詞である。場所を表す名詞句に $j^{\hat{o}}$ 「この」が後続していれば、その場所は話し手の領域であるから、それが着点として解釈され、?_ò「あの」が後続していれば、その場所は話し手の領域ではないから、それが起点として解釈されるのは当然の帰結である。一方、 $l^{\hat{e}}$ 「行く」の場合には、着点が話し手の領域であってはならないという制限があるので、(13)のように $j^{\hat{o}}$ 「この」が使われた場合には当該の場所は当然、着点ではなく起点と解釈される。しかし、 $l^{\hat{e}}$ に起点に関する制限はないので、論理的に考えれば、(14)のように ?_ò「あの」が使われた場合、 $l^{\hat{e}}$ によって導かれた名詞句は着点ではなく起点であってもよいはずである。しかし、(14)の「パアン」は着点であると解釈される。これは習慣的にそう決まっているようである。では、動詞 $l^{\hat{e}}$ 「行く」を用いたときに、話し手の領域では

ない起点を表すにはどうすればよいのか。その方法は、次のように2つの節を用いることである。

- (15) ?əwē ?sí ló thə?àN ?ò yòn, mə lì ló ləkōuN ?ò
 3sg いる ló パアン あの ~して IRR 行く ló ヤンゴン あの
 彼はパアンからヤンゴンに行くだろう。

ここでは、まず起点である「パアン」が動詞 ?sí「いる、ある」によって位置として表現される。そして ?síを含む節が継起を表す従属節標識 yònによって導かれ、主節において動詞 lì「行く」を用いることで、この複文全体において「パアン」は起点としての解釈を受けることになる。

yê「来る」と lì「行く」以外の移動動詞の場合は、lóに導かれた名詞句の意味役割が着点か起点かは主として文脈によって識別されることになる。先に挙げた(9)の例文はテキストに現れた実例であり、この文が現れた実際の文脈から「パアン」が着点であることが分かる。しかし、同一の文が別の文脈に置かれた場合、「パアン」が起点と解釈されることもあり得る。このように、*yê*と lì 以外の移動動詞では文脈の助けなくしては意味役割が決定できない。おそらくこの曖昧性を排除するために役立っているのは、第一動詞として *yê*あるいは lì を用いた動詞連続を使うことである。¹ 先に挙げた(10)に現れた動詞連続 *yê thàin* (来る-帰る)「帰って来る」がその例である。この例では動詞 *yê*と助詞 ?òの組み合わせによって、文脈の助けに拠らずとも「病院」が起点であることが分かるのである。*yê/lì*と他の移動動詞からなる動詞連続には、他に lì thàin (行く-帰る)「帰って行く」、*yê tháN* (来る-上がる)「上がって来る」、lì thán (行く-上がる)「上がって行く」、*yê làN* (来る-下がる)「下りて来る」、lì làN (行く-下がる)「下りて行く」などがある。

ところで、lóには場所を表す用法以外に、時間を表す用法もある。lóは、出来事が生起する時点、あるいは、時間的区間の起点を表す。下にそれぞれの例を示す。

- (16) ló [R chəchəN tháu] ?əkhâ ... [時点]
 ló 雨 終わる 時
 雨がやんだ時に... (II-10.2)

- (17) ló muūyá jàu jə thòn yéiN phəN ?é [時間的区間の起点]
 ló 昨日 ずっと 1sg 着く 家 ~回 NEG
 私は昨日からずっと一度も家に帰っていない。 (001.2085)

これらはそれぞれ場所を表す用法の「位置」と「起点」に対応する用法だと思われるが、「着点」に対応する用法は存在しない。時間的着点すなわち「~まで」は、従属節標識 thōN「~するまで」を用いて次のように表現する。

¹ ポー・カレン語の連結型動詞連続には、*yê*あるいは lì が第一動詞として現れなければならないという規則がある (加藤 1998, 2004)。

- (18) *jə mə ?ókhò nə thōN ?ə thōN lə nàdi*
 1sg IRR 待つ 2sg ~するまで 3sg 着く 一 ~時
 私はあなたをそれ (=時間) が 1 時になるまで待つ。(001.353)

最後に 3 つの重要な点を指摘しておきたい。第一点は、*ló* の「省略」である。² 着点を表す *ló* は往々にして (19) のように「省略」されることがある。

- (19) *jə mə li cəpāN*
 1sg IRR 行く 日本
 私は日本に行く。

ちなみに、筆者が手持ちのテキスト 70 編を調査したところ、動詞 *li* 「行く」に後続して現れた着点名詞句 26 例のうち、8 例 (31%) に *ló* が現れていなかった。同様に、*yê* 「来る」では 4 例のうち 2 例 (50%)、*thāiN* 「帰る」では 15 例のうち 4 例 (27%) に *ló* が現れていなかった。合計すると 45 例のうち *ló* が現れていなかったのは 14 例 (31%) であり、これを見る限りでは、*ló* の「省略」は比較的頻繁に起きると言える。

同様に、位置を表す *ló* は、動詞が *?ó* 「ある、いる」の場合に次のように「省略」されることがある。他の動詞の場合は、位置を表す *ló* は決して「省略」されない。

- (20) *?əwē ?ó yéiN*
 3sg いる 家
 彼は家にいる。

さらに、起点を表す *ló* は、動詞連続 *yê thāiN* (来る-帰る) 「帰って来る」の場合に次のように「省略」されることがある。これ以外の述語の場合、起点を表す *ló* は決して「省略」されない。

- (21) *?əwē yê thāiN ?āiN khāN jàu*
 3sg 来る 帰る タイ 国 PRF
 彼は既にタイから帰ってきた。

第二点は、*ló* には日常のくだけた会話でのみ用いられる自由変異形として *lé* および *lú* があるということである。*lé* は後続名詞句の表す場所・時間が発話の場所・時間から近い場合に、*lú* は遠い場合に、使われる。したがって次のように、*jò* 「ここ」を用いた (22) の場合には *lú* を用いると不適格になり、逆に *?ò* 「そこ」を用いた (23) の場合には *lé* を用いると不適格になる。

² 省略という用語を括弧で囲んだのは、これを省略と考えずに *ló* とゼロの交替と見なして、ゼロに積極的な機能を見出す解釈もあり得るからである。本稿ではさしあたって省略と見なしておく。

- (22) ?s { l̥ / l̥ / *l̥ú } j̥ò
ある ここ

ここにある。

- (23) ?s { l̥ / *l̥ / l̥ú } ?ò
ある あそこ

あそこにある。

第三点は、*l̥* によって導かれた名詞句は次のように他の名詞句を後から修飾することができるということである。このような名詞句修飾に用いることのできる *l̥* の表す意味役割は位置のみである。

- (24) *phlòuN l̥ pəjāN khāN θ̥è*
人 *l̥* ピルマ 国 PL
ビルマの人々。

3.1.2. 側置助詞 *thōN*

thōN は動詞 *thòN*「到着する」に由来する側置助詞であり、名詞句の前に置かれる。*thòN* とも発音される。この助詞は位置を表すが、*l̥* の表す位置とは違って、名詞句の表す範囲の周辺をも含む、比較的広い場所を表す。「～のあたり」と訳すことができる。

- (25) *j̥o m̥ə ?ánkhw̥e thōN j̥ò l̥̥*
1sg IRR 釣る *thōN* ここ (断定)
私はこのあたりで釣りをします。 (I-06.62)

thōN に導かれた名詞句は、次のように別の名詞句を後から修飾することができる。

- (26) *phlòuN thōN j̥ò θ̥è*
人 *thōN* ここ PL
このあたりの人々。

thōN には時点を表す用法もある。位置を表す場合と同様、名詞句の表す範囲の周辺を含む、比較的広い時点を表す。「～のころ」と訳すことができる。

- (27) *thōN [k̥hùl̥à?wà p̥èN pəjāNkhāN] l̥əthōNkhw̥ijàchil̥i néin*
thōN イギリス 統治する ピルマ国 1914 年
khâ ...
時
イギリスがビルマを統治していた 1914 年のころ... (III-11.10)

3.2. Local な意味を表す名詞 (場所名詞)

加藤(2004)は、ポー・カレン語の *?əklà*「間」、*?əphâNkhú*「上」、*?əphâNlá*「下」、*?əphâN*「中」、*?əméjá*「前」、*?əlāNkhâin*「後」、*?ə?j*「ところ、存在場所」などの物体との相対的位置や物体そのものの局所を表す名詞を「場所名詞」(location noun)と呼んだ。これらには一般的の名詞にはない特徴がある。それは、これらが地点を表す格標示形式と見なせるような働きを示すことがあるということである。下の例を見ていいただきたい。

- (28) *θî wê thî klà*
死ぬ (強調) 水 間
水の中で死んだ。(III-12.34)

- (29) *phló báN ?ə phú mèin θàNkhâ ?j*
名付ける (完成) 3sg 子供 名前 僧侶 ところ
(父親は) 僧侶のところで子供の名前をつけた。(005.4)

(28) と (29) で重要なのは、地点を表す助詞 *lé* が現れていないということである。そこで、名詞 *?əklà* や *?ə?j* は、前の名詞句を節中に存在させる働きをしていると見ることができる。上記の名詞群を「場所名詞」と呼んで他の名詞と区別するの はこのためである。³

しかし、これらの名詞を格標示形式と見なすことはできない。なぜなら次に示すように、これらの名詞と側置助詞 *lé* とを共起させることができるからである。

- (28') *θî wê lé thî klà*
死ぬ (強調) lé 水 間
- (29') *phló báN ?ə phú mèin lé θàNkhâ ?j*
名付ける (完成) 3sg 子供 名前 lé 僧侶 ところ

加えて、*?ə?j* を除くすべての場所名詞は単独でも発話可能であり、かつそれ自身が動詞の項になることもできる。このような性質を持つ形式を格標示形式と見なすことには無理がある。

なお、「上」を表す *?əphâNkhó* には、感情の対象を表す名詞に付く用法がある。

- (30) *hə pàdó jàujáN bá nə phâNkhó*
1pl 尊敬する 敬う (無意志) 2sg 上
私たちはあなたを尊敬しています。

³ (28) の *klà* と (29) の *?j* はそれぞれ、*?əklà* と *?ə?j* から接頭辞 *?ə-* が脱落したものである。ポー・カレン語では、接頭辞 *?ə-* を持つ名詞の前に何らかの要素が出現した場合、*?ə-* が脱落することがある。

隣接するチベット・ビルマ系言語であるビルマ語の名詞 *?əpò*「上」にも、これと同様に、感情の対象を表す名詞に後置される用法がある。⁴ ポー・カレン語の *?əphâNkhú* の上記用法がビルマ語の影響によって生じた可能性も否定できない。

4. その他の格標示形式

本章では、前章で見た場所に関連する側置助詞 *ló* と *thōN* 以外の 7 つの側置助詞を見る。さらに、純粋な格標示形式ではないが側置助詞と同様の働きを示す名詞である側置名詞について見ていく。

4.1. 側置助詞 *dē*

助詞 *dē* (*dè*, *lē*, *lè* などとも発音される) は名詞句の前に置かれて、道具、随伴者、付帯物、相互的な状況の相手、様態、三項他動詞の使役構文の被使役者などを表す。以下にそれぞれの例を挙げる。

道具

- (31) *pə mə lì dē khli*
1pl IRR 行く *dē* 舟
私たちちは舟で行きます。 (I-06.15)

- (32) *yéiN nō thí théuN thán nī wē dē wá nō lō*
家 TOP も 立てる (上方) 得る EMPH *dē* 竹 のだ (断定)
家も竹で建てるのである。 (III-16-13)

随伴者

- (33) *jə mə lì cainkwè dē xiphàN*
1sg IRR 行く 遊ぶ *dē* フイパウン
私はフイパウンと遊びにいく。 (IV-04.162)

付帯物

- (34) *pəwêdá ?j dē pə théuN pə thà jàu*
1pl いる *dē* 1pl 肝臓 1pl 心臓 PRF
私達には肝臓や心臓が既にある。 (I-04.11)

付帯物を表す *dē* は次のように他の名詞句を後から修飾することができる。

⁴ 例えばビルマ語の名詞 *?əpò*「上」の次のような用法である。 *cānò tū ?əpò lēzā dè* (1sg-3sg-上-敬う-REALIS)
「私は彼を尊敬している」

(35) *phlòuN dē khóláu*

人 dē 帽子

帽子をかぶった人。

相互的な状況の相手

(36) *phúθá ?əjò máu lóθà dē ?əwé*

子供 これ 快適な RECP dē 3sg

この子供は彼と仲が良い。(001.2358)

(37) *phàbàu dē láiN khwékəbàN nó l̥*

近い dē 山 ゾエカビン のだ (断定)

(パアン市は) ゾエカビン山に近いのだ。(III-17-21)

様態

(38) *yé thàiN wé dē ?əpwàiθà kh̥*

来る 帰る EMPH dē 疲労 (対比)

(彼は) 疲れて帰ってきた。(II-02.16)

三項他動詞の使役構文の被使役者

使役助詞を用いて三項他動詞の使役構文を作る場合、被使役者は *dē* に導かれて現れる。受領者を表す名詞句は「使役助詞 + 動詞」の直後に置かれ、さらにその後に授受の対象を表す名詞句が置かれる。次の例に示すとおりである。

(39) *jə dà phílân θàkhléiN lái?àu dē θà?wà*

1sg CAUS 与える タークレイン 本 dē ターワー

私はターワーに頼んで、タークレインに本を渡してもらった。

4.2. 側置助詞 *bē* ... *θò*

助詞 *bē* ... *θò* は類似物を表す。「～のように」と訳せる。*bē* と *θò* で名詞句を挟み込む。*bēθò* ... *θò* という形もある。また、*bē*... , *bēθò*... あるいは ... *θò* それぞれが単独で使われることもある。

(40) *?əjôN ?j bē míkhúá θò l̥*

色 ある bē 煙 θò (断定)

色は煙のようである。(III-05.58)

- (41) ?ókí jò bê ?əθíwê xōnmúá lə yà θò
 置く 1sg bê 3pl 女奴隸 ～～人 θò
 (彼らは) 私を奴隸のように扱った。 (V-04.191)

bê ... *θò* によって導かれた名詞句は、次のように他の名詞句を後から修飾することができる。

- (42) chəθúachəθá bê khòθá θò
 果物 bê マンゴー θò
 マンゴーのような果物。

4.3. 側置助詞 *nî*

名詞句の前に置かれて、同じ程度の大きさであることを表す。「～くらい」。

- (43) ?ó nî jò l̪
 ある *nî* これ (断定)
 (それは) これくらいの大きさだ。

nî によって導かれた名詞句は、次のように他の名詞句を後から修飾することができる。

- (44) lé nî cuákhú
 棒 *nî* 腕
 腕くらいの大きさのある棒。

4.4. 側置助詞 *xwē*

名詞句の前に置かれて、同じ程度の量であることを表す。「～くらい」。動詞 *xwè* 「満ちる」に由来する。*xwè* あるいは *xwê* とも発音される。

- (45) ?óth̄j̄ thàin xwē jò l̪
 残る 今度は *xwē* これ (断定)
 (借金が) 今度はこれくらい残ってしまった。 (V-03.124)

xwē によって導かれた名詞句は、次のように他の名詞句を後から修飾することができる。

- (46) páichâN xwē jò
 金 *xwē* これ
 これくらいの額のお金。

4.5. 側置助詞 báchâin

名詞句の前に置かれて、「～に関して」「～について」という意味を表す。動詞 báchâin「～に関する」に由来する。この動詞はビルマ語 *shàin-*「関係する」の借用語である可能性がある。

- (47) *báchâin dòunláu* *thōunthōxómèin* *nó hə ?è chônmón thàin*
 báchâin 八正道 TOP 1pl もし 考える また
càibò ...
 なら

八正道について再び考えるなら... (014.21)

báchâin によって導かれた名詞句は、次のように他の名詞句を後から修飾することができる。

- (48) *lái?àu báchâin phlòuN thìkhāN*
 本 báchâin カレン 国
 カレン州についての本。

4.6. 側置助詞 təkhôló

名詞句の前に置かれて、ある時点から間断なく続いていることを表す。「～以来」「～からずっと」。*khòkhôló* という形もある。

- (49) *təkhôló ?əjáu ləchînī néin khâ ?ò jàu lò bóuN θà*
 təkhôló 年齢 十二 ～年 時 あの ずっと 語る 勇気のある 心
dùi ?əkhúcòn ...
 勇敢な ～なので

12 才の頃から、(自分の意見を言う) 勇敢さを持っていたので... (V-04.29)

4.7. 側置助詞 phō

時間帯を表す名詞句の前に置かれ、「～のうちに」「～以内に」という意味を表す。phō とも発音される。

- (50) *phō [R nə lì nī] khâ lì wè*
 phō 2sg 行く 可能な 時 行く ておく
 行ける間に行っておきなさいよ。 (001.2892)

4.8. 側置名詞

加藤(2004)は、名詞句の後に置かれて側置助詞と似た特徴を持つ名詞を側置名詞(adpositional noun)と呼んだ。側置名詞には *?əyāN* 「～のため etc.」のみがある。⁵

側置名詞が側置助詞と似ている点は以下に述べる二点である。まず一点は、側置名詞はそれ単独では発話されないということである。*?əyāN* は単独では発話されないという点で助詞に似ている。もう一点は、名詞句を節中に導入する働きを持つということである。(51) に現れた *?əyāN* は名詞句 *thikhāN* 「国」を節中に導入する働きをしている。

しかしながら、側置名詞は次の一点において側置助詞と異なる。それは、側置名詞は側置助詞と共に起し得るということである。「名詞句 + ?əyāN」には次のように、側置助詞 *dē* あるいは *lō* が前置されることがある。

- (52) *kl̥ic̥i* *mà* *dē* / *lé* *th̥ikhāN* *?əyāN*
努力する 行う dē lé 国 ため^た
国のために努力して行う。

この *dē* は様態を表す用法と解釈することができるだろう。*ló* の解釈は難しいが、事象の生じる抽象的位置のようなものを表していると解釈しておく。側置助詞と共にすることから、側置名詞は純粋な格標示形式ではないと考えられる。

側置名詞を名詞の下位分類であると考える根拠のひとつは、側置助詞が共起するというこの事実である。そしてもうひとつは、名詞派生接頭辞である ʔ_θ - を第一音節として有していることである。なお、 $\text{ʔ}_\theta yān$ の ʔ_θ - はしばしば脱落する。特に人称代名詞が前置された場合にはほぼ義務的に脱落すると言ってよい。

次に、*?əyāN* の表す意味の詳細を見る。*?əyāN* の用法として最も頻度が高いのは受益者を表す用法である。先に見た(51)も *?əyāN* が受益者を表す例である。下に他の例を示す。

- (53) *?əwē thəmnlī θà?wà ?əyāN* [受益者]
 3sg 踊る ターワー ?əyāN
 彼はターワーのために踊る。

⁵ 加藤(2004)では「*そこ*」「*存在場所*」を側置名詞に含めたが、*そこ*は場所名詞に分類するのが妥当であると考えられるので、本稿では3.2で述べた。同様に加藤(2004)では「*原因*」「*理由*」を側置名詞に含めたが、これは側置助詞 *də* と共に現れることが普通なので、本稿では除外する。

- (54) *jø ȳɛ thàin xwè phí nø yāN* [受益者]
 1sg 来る 帰る 買う BEN 2sg ?øyāN
 私はあなたのために買ってきてやった。 (001.1352)

- (55) *tøwāN yāN chìchá yāN thîkhāN yāN mø káu mø ȳɛ mø phílāN dè yāinbjà* [受益者]
 村 ?øyāN 民族 ?øyāN 国 ?øyāN IRR 努める IRR 動く IRR
 与える dē 力
 (彼は) 村のため、民族のため、国のために、奮闘し、力を注ぐだろう。
 (V-05.120)

しかし、現在までに分かっている限りでは、受益者以外にも、目的、判断の基準点、感情の対象、代替される対象、依拠する情報などを表すことがある。下にそれぞれの例を示す。

- (56) *pø ȳɛ ?áNXtā cì ?øcá [R pøtòn ló jâ] yāN* [目的]
 1pl 来る 探す 金 人生 築く ló 将来 ?øyāN
 私達は将来築く人生のために(ここに)やって来て金をためているのだ。
 (IV-03.11)

- (57) *mø nà nī tøcā ló ?øwé?ø yāN nò lô* [判断の基準点]
 IRR 大変な(執拗) 本当に ló 3sg ?øyāN のだ(断定)
 彼にとっては本当に困難なことだろうよ。 (001.2662)

- (58) *θàucà køtò bá nø yāN châmā lô* [感情の対象]
 タウチャー 心配する(無意志) 2sg ?øyāN 非常に(断定)
 タウチャーは君のことをすごく心配しているんだよ。 (IV-04.31)

- (59) *høphlòuN chì ?øyāN phlòuN dòuNløkōuN θɛ li thøuNlî tōuN*
 カレン 民族 ?øyāN 人 ヤンゴン PL 行く 踊る ドン
 ló cìNkøpù [代替される対象]
 ló シンガポール
 カレン人の代わりにヤンゴンの人たちがシンガポールに行ってドン[カレンの民族舞踊]を踊った。 (016.34)

- (60) *[R chérâmuá lò] chè ?əyāN nò phón nī dá wē phlòuN lə yà jàv* [依拠する情報]
 女先生 語る もの ?əyāN TOP 捕まえる 得る てある EMPH
 人 ー ~人 PERF
 先生の語ったところによると、人を1人逮捕してあるということだ。
 (015.18)

?əyāN によって導かれた名詞句は、次のように他の名詞句を前から修飾することができる。

- (61) *phúθá ?əyāN lái?àv*
 子供 ?əyāN 本
 子供のための本。

5. 格標示機能以外への転用

位置/着点/起点を表す側置助詞 *ló* には、主語名詞句や目的語名詞句の前に置かれて、その名詞句を強調する用法がある。この *ló* は格標示機能を失っている。加藤(2004)はこの *ló* を側置助詞ではなく名詞修飾助詞 (noun modifying particle) に分類した。次の例を見ていただきたい。

- (62) *ló phjā bàθàNkhâ lə yà nò kəthūá kī*
 ló やつ 仏教徒 1 CLF その 愚かな 非常に
 その仏教徒はたいへん愚かだった。(025.9)

- (63) *?áN ló ?ə?wí nò*
 食べる ló おいしい物 その
 おいしい物を食べなさい。(II-14.1)

(62) は主語名詞句に前置された例、(63) は目的語名詞句に前置された例である。それぞれ、*phjā bàθàNkhâ ló yà nò* 「その仏教徒」と *?ə?wí nò* 「おいしい物」を *ló* が強調している。

6. まとめ

以上、ポー・カレン語の格標示形式を概観した。ポー・カレン語は SVO 型言語であり、S/A/P の標示には相対的語順が用いられる。それ以外の名詞句の意味役割の標示において中心的役割を演じるのが側置助詞である。重要な事実として、側置助詞のうち *ló* は、位置/着点/起点のいずれをも表すという点で特徴的であり、位置/着点/起点のどれを表しているかの識別には動詞の種類と指示機能を持つ助詞の

使用が関与していることを指摘した。今後は、ひとつひとつの格標示形式の用法を引き続き丹念に見ていく必要がある。

[付録 1]: 所有者と所有物

ポー・カレン語において所有者と所有物の関係がどのように表されるかについてここで触れておきたい。ポー・カレン語にはいわゆる属格形式は存在しない。所有者と所有物の関係は、所有者を表す名詞を、所有物を表す名詞の前に置くことによって表される。次のとおりである。

- (64) *chərâ yéiN*
先生 家
先生の家

下に示すように、所有物を表す名詞には所有者に対応する代名詞が前置されることがある。*?ə yéiN* の部分はこれだけでも「彼(彼女)の家」という意味を表す。

- (65) *chərâ ?ə yéiN*
先生 3sg 家
先生の家

「名詞 + 名詞」という語順が「所有者 + 所有物」だけを表すのではないことは注意すべきである。ポー・カレン語では、普通名詞と普通名詞が並列されるとき、前の名詞が修飾語、後の名詞が被修飾語と解釈される。例えば次の例を見よ。

- (66) *pəθàbán kòUNlWÉ*
若者 組織
若者からなる組織

「所有者 + 所有物」という関係は、この「修飾名詞 + 被修飾名詞」という語順が表す様々な意味関係のうちのひとつだと考えられる。

[付録 2]: Western Pwo Karen の *ló*

チョンビョー方言 (Western Pwo Karen に属す) では、パアン方言の道具や随伴者などを表す *dē* に対応する助詞がなく、位置/着点/起点を表す助詞 *ló* (パアン方言の *ló* に対応する) が道具や随伴者をも表す。下に例を示す。

- (67) [Kyonbyaw] *?əwè ?àu ló wéintəkhóun jí* [位置]
3sg いる *ló* ヤンゴン この
彼はヤンゴンに住んでいる。

- (68) [Kyonbyaw] ?əwè lé ló wéintəkhóun ?ó [着点]
 3sg 行く ló ヤンゴン あの
 彼はヤンゴンへ行った。

- (69) [Kyonbyaw] ?əwè yái tháin ló wéintəkhóun ?ó [起点]
 3sg 来る 帰る ló ヤンゴン あの
 彼はヤンゴンから帰ってきた。

- (70) [Kyonbyaw] ?əwè lé ló khli [道具]
 3sg 行く ló 舟
 彼は舟で行った。

- (71) [Kyonbyaw] ?əwè lé ló ?ə mō [随伴者]
 3sg 行く ló 彼の 母
 彼は母と行った。

意味役割の識別には当然パアン方言とは別の原理が働いているはずであるが、その詳細は明らかではない。様々な方言間の格標示形式の差異については今後の研究に俟ちたい。

略号

BEN	受益者を表す動詞助詞	RECP	相互行為を表す助詞
CAUS	使役助詞	TOP	主題を表す助詞
CLF	助数詞	1sg	一人称単数代名詞
EMPH	強調を表す助詞	2sg	二人称単数代名詞
IRR	irrealis modality を表す助詞	3sg	三人称単数代名詞
NEG	否定を表す助詞	1pl	一人称複数代名詞
PL	複数を表す助詞	2pl	二人称複数代名詞
PRF	完了を表す助詞	3pl	三人称複数代名詞
[_R]	関係節		

資料

例文に付した IV-04.102 などの記号は筆者の資料における整理番号である。ピリオドの前が資料番号、ピリオドの後の数字が文番号を表す。資料のリストは加藤 (2004:549-552) に挙げてあるので参照されたい。

ポー・カレン語パアン方言の音素目録

子音	母音								声調
p	θ[t]	t	c	k	?	i	ɪ	ɯ	má [55]
ph		th	ch	kh		ɯ	ʊ		mā [33]
b[β]		d[d̪]				e	ə	o	mà [11]
			ç	x	h	ɛ	a	ɔ	mâ [51]
				χ	ɥ				(mə 軽声)
m		n	jŋ	ŋ	N				
w			j						
		l	r						

韻母の目録

i	ɪ	ɯ	ai	au	(ɪn)	ən	eɪn	əɪn	oʊn
ɯ		ʊ			ən	ən			
e	ə	o							
ɛ	a	ɔ							

参考文献

- Blake, Barry J. 2001. *Case*. (second edition) Cambridge: Cambridge University Press.
- Jones, Robert B. 1961. *Karen Linguistic Studies*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Kato, Atsuhiko. 1995. "The phonological systems of three Pwo Karen dialects." *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 18.1:63-103.
- 加藤昌彦 (Kato, Atsuhiko). 1998. 「ポー・カレン語（東部方言）の動詞連続における主動詞について」『言語研究』 113:31-61
- 加藤昌彦 (Kato, Atsuhiko). 2004. 「ポー・カレン語文法」. 東京大学博士論文.
- Kato, Atsuhiko. 2008. "A first report on 'Htoklibang' Pwo Karen and reconstruction of the Proto-Pwo phonemic system." Paper presented at the 41st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, September 2008, SOAS, University of London.
- Lewis, Paul and Elaine 1984. *Peoples of the Golden Triangle*. London and New York: Thames and Hudson.
- Manson, Ken. 2003. *Karenic language relationships: A Lexical and Phonological Analysis*. Chiang Mai: Dept of Linguistics, Payap University.
- Phillips, Audra. 2000. "West-Central Thailand Pwo Karen phonology." *33rd ICSTLL Papers*, pp. 99-110. Bangkok: Ramkhamhaeng University.
- Shintani, Tadahiko L. A. 2003. "Classification of Brakaloungic (Karenic) languages in relation to their tonal evolution." Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the Symposium Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Historical Development, Phonetics of Tone, and Descriptive Studies*, pp.37-54. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.